

インド政治史研究と州議会議事録

佐藤 宏

もやもやした気持ちで書き始めるのは落ち着かないので、最初にはつきり言ってしまうおうと思う。私は三〇年あまりの間、研究者としての活動を、図書館を含む研究所の諸便宜によって支えていただいた。ライブラリアンの方がたのご苦労にも、多少は身近に接してきた。なによりも、その後もことあるごとに、図書館の豊かな蔵書の恩恵にあずかっている。「使い倒す」などというよりも、図書館は私にとっての「命綱」であり、「駆け込み寺」である。こだわり症の私を落ち着かなくしているのは、このシリーズの標題である。

私はインドの政治史を専門分野にしている。近年、とくに一九九一年の経済自由化以降のインドへの関心の高まりは、それ以前から研究を続けてきたものにとっては隔世の感がある。並行して現代インドの研究にもある種の偏りがみられる。一九九一年以前を「先史時代」に追いやり、もっぱら自由化以降のインド政治、インド経済に目を向ける。ジャーナリズムや経済界であれば無理もないことだが、学問的な研究のなかにも、その影響はさまざま形で忍び込んでいる。しかし、世のなかは良くしたもので、先を急ぐあまり見落としがちな貴重な忘れ物に注意を喚起してくれる、歴史研究者のような人々もいる。私がこの仕事を始めたばかりの一九六〇年代から七〇年代のインド政治は、すで

に歴史研究のれっきとした、しかも豊饒な対象分野になってきている。

こうしてインド独立後の政治史が歴史研究の対象として関心を集めるなかで、図書館が創設以来蓄積してきた各種の一次資料の価値に光が当たることだろう。その一例は、州レベルの各種資料、特に各州議会議事録の存在である（主として州下院 Legislative Assembly のものであるが、「州議会」としておく）。独立前の州議会議事録の価値は、商業化されたマイクロフィッシュの存在から知られよう（図書館も国内の数少ない所蔵館のひとつである）。独立後の州議会議事録も、商業化こそされてはいないが、政治史研究の不可欠な一次資料である。

図書館が議事録を所蔵するのは、トラヴァンコール・コーチン（一九五五～五六）、ケーララ（一九五七）、マドラース（一九四八～五八）、西ベンガル（一九五二～七四）、アーンドラ・プラデーシュ（一九六二～六四）、アッサム（一九六四～二〇〇四）の六州である、時期も欠号の状態もまちまちだが、いずれも各州の政治史上、きわめて重要な時期を含んでいる。またインドではないが、東ベンガル（東パキスタン）州議会議事録が一九四八～五三および一九五六から六九年間について所蔵されている。

このうち、東ベンガル（東パキスタン）とアッサムの議事録は、私自身、全巻に目を通した。

一例を挙げると、前者では、インド・パキスタンの分離独立時に亜大陸で発生した難民のうち、最も研究が遅れている、インドから東パキスタンに流入したイスラーム教徒難民（いわゆるビハリー）に関する貴重な公式記録が得られる。また、アッサム州議会議事録に目を通すと、一九六二年の中印戦争前後から州政府が強化し始めた東パキスタンからのムスリム移民流入抑制策の実態、あるいは末端での移民問題の受け止め方についての生々しい声を読みとれる。

また西ベンガルとケーララの議事録の特徴は、いずれも食糧問題、食糧政策に関する討論が豊富なことである。ケーララでは一九五七年に成立した共産党政権以降、配給制度が定着した。西ベンガルでは一九五九年に大きな食糧暴動が発生し、その後一九六七年に成立した統一戦線政権のもとで、食糧政策の見直しが開始された。この二つの「左翼州」における食糧政策の比較には、議事録の記事はきわめて有益である。

また州のレベルの一次資料として見落とせないのは、各州政府の統計資料である。統計年鑑を始め、基礎的な統計資料の収集が行われた。近年は電子情報で入手可能な部分もあるが、個別に実施された統計調査の報告書など、一九九〇年代以前の資料へのアクセスには限界がある。

現在が過去へ、それも三〇年ほど前の過去へと移りゆくのに、さほどの時間は要しない。研究所の図書館が、三〇年後といわず、時代と共に常にその真価を発揮できるような機関であり続けることを心から願っている。

（さとう ひろし／南アジア研究者）